

ドナルド・キーン、寄り道くねくね 《第1回》

日本文学よ、 さようなら?

1940年、18歳のときに『源氏物語』と出会ったドナルド・キーン青年は、太平洋戦争が始まるとアメリカ海軍の日本語学校を経て、語学将校になりました。

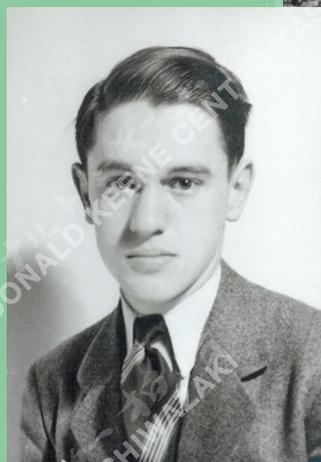
戦死した日本兵の日記を読んで心を揺さぶられ、親しくなった捕虜の日本兵たちと敵・味方を超えて心を通わせます。戦争はキーン青年をますます日本と固く結びつけました。

日本への思いをつのらせたキーン青年は、戦争が終わって大学に戻ると、日本文学の勉強をスタートさせました。そこまではよかったのだけれど.....

今回は、ドナルド・キーン先生が日本文学になったばかりのころの、ちょっとトホホな出来事を紹介します。

ドナルド・キーン (1922-2019)

コロンビア大学名誉教授。アメリカ、ニューヨーク生まれ。大学生だった18歳のときに『源氏物語』を読んでその世界に没入、19歳で米海軍日本語学校に入学し、11か月で日本語を習得する。以降、日本と日本文学をこよなく愛し、ついに2012年には日本に帰化した(当時89歳)。



戦争がくれた贈り物

1945年の夏、太平洋戦争は終わりました。敗戦国日本はぼろぼろ。海軍日本語学校で一緒に学んだ仲間の多くが「日本語」から離れていきました。でもドナルド・キーン青年はちがった。「日本語は、戦争がぼくにくれた贈り物。ぜったい捨てるもんか」。

大学に戻ったキーン青年、日本文学の勉強を始めます。そして1948年、26歳のときに奨学金を得て、イギリスの名門ケンブリッジ大学への留学が実現したのです(日本に行きたかったけど、当時の日本はまだ連合軍の占領下にある、留学は難しい時代でした)。

はじめて学生相手に授業する

さて、ケンブリッジ大学で勉強を始めてまもないころ、留学生の身ながら、日本語の会話の授業を担当することになりました。当時のケンブリッジに日本人の先生がいなかったからです。助っ人の講師にすぎなかったけれど、学生を教えることになったので、ここからは「キーン先生」と呼びましょう。

授業では『古今和歌集』の冒頭の「序」の部分を使いました。会話の授業なのに古文なの？と思うけど、それが当時のケンブリッジ大学の伝統的な教え方でした。

キーン先生は、学生たちに日本文学の魅力を伝えたくてしかたがありません。なのに学生は2、3人ぼっち。なんかむなしい。ちょうどそのころ、先生の最初の本も出版されました。日本の古典芸能の人形浄瑠璃について書いた本でしたが、その売れ行きもさっぱり。これもなんかむなしい。日本文学に関心をもってほしいのに……。

13世紀初頭創立のケンブリッジ大学



↑
ドナルド・キーンが使っていた部屋

日本文学を捨てよう、と思ったとき

そこでキーン先生、ひらめいた。「だれでも参加できる日本文学の公開講義をやればいいんだ。大学の教室を使って5日間。うむ、グッドアイデアかも」。1952年の春のことでした。

入念に原稿を準備して迎えた公開講義の初日、期待と不安から胸バクバク状態で教室のドアを開けた先生は思わず「げげっ!」。無理ありません。250人は入る広い教室に、聴衆はわずか10人ほど。それが横一列に並んで座っていたのですから。顔ぶれも下宿先の大家さん夫婦をはじめ、みんながみんな義理で来てくれた知り合いの人。講義が始まるとウトウトする人もいたりして……。

がら〜んとした教室で、5日間の講義をなんとかやり終えたけど、キーン先生の落胆はハンパじゃなかった。おもしろい講義にするために工夫をこらし、日本文学へのありったけの愛情と知識がてんこ盛りの原稿を準備したのに……。

日本文学が好きで好きでたまらなかったキーン先生、そのすばらしさを多くの人に伝えたかったのだけれど、当時のヨーロッパでは、日本は「はるか遠くの国」。日本文学に関心のある人なんてほとんどいなかったのです。

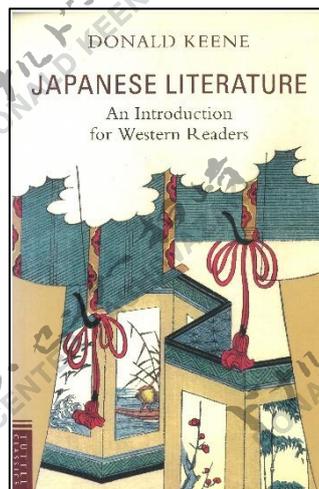
「もう日本文学は捨てよう……」。傷心の先生はこのとき本気でそう思ったのです。

もっと人気のある外国文学に鞍替えしよう、ロシア語のクラスに出席したりしますが、どうも違うのです。キーン先生いわく、「自分の中のなにかが、日本語の代わりになるものを拒否している感じだった」。

一転、「天にも昇る気持ち」に……

それでなんとか気を取り直し、「日本に留学できないかなあ」と考えていたところへ、思いがけない朗報が入ります。なんと、出版社がああ連続講義の原稿を本にしたいというではありませんか! キーン先生、このときはもう天にも昇る気持ち。翌年春に、*Japanese Literature: An Introduction for Western Readers* というタイトルで出版されたその本は、いくつもの文学雑誌の書評で絶賛され、日本文学を知りたい人の必読書として世界中でさまざまな言語に翻訳されました。もちろん日本語版もありますよ(『日本の文学』)。

こうしてキーン先生は、自信を取り戻すことができました。そして同じ年の1953年、奨学金を手に入れて、はじめての日本留学も実現します。もう、ドナルド・キーン先生の気持ちが揺らぐことはありませんでした。



〈第1回、終わり〉

ドナルド・キーン、寄り道くねくね 《第2回》

若かりし日の、 あなた日本語修行

アニメやマンガの影響で日本語を学ぶ外国の人が増えましたね。きっかけはなんであれ、おとなになってから日本語をマスターしようなんてすごいと思いませんか？ ドナルド・キーンはまさにそのさきがけ世代。もとはといえば、ニューヨークに生まれ、幼いころから英語で会話し、英語で文章を書き、英語でものごとを考えて育った人です。

今回はそのドナルド・キーンが漢字の面白さにはまり、日本語を学び始めたころのことをちょっとだけ紹介します。

ひょっとしたら、わたしたちは、ふだんふつうに使ってる日本語のわくわくするような魅力を、ドナルド・キーンに教えてもらえるのかもしれない。

ドナルド・キーン (1922-2019)

コロンビア大学名誉教授。アメリカ、ニューヨーク生まれ。大学生だった18歳のときに『源氏物語』を読んでその世界に没入、19歳で米海軍日本語学校に入学し11か月で日本語を習得する。以降、日本と日本文学をこよなく愛し、ついに2012年には日本に帰化した(当時89歳)。



キーン青年、漢字の世界の大冒険

「なにか漢字を教えてくれないかな」。16歳のキーン青年が中国人の友だちの李くんに言いました。ふたりで海水浴に行ったときのことです。

李くんはちょっと考えて、棒切れで砂の上に1本の短い横線を引きました。「これが“one”」。続けて2本の線と

3本の線を引いて、「“two”と“three”」。「へえ、そのまんまじゃん」とおもしろがっていたら、“four”からはわからなくなった（たしかに）。でもそれがまた、なんか漢字っぽい。こうして李くんに教わりながら、キーン青年の漢字とのつきあいは始まりました。

「ひとつひとつの文字に意味があるなんて!」。アルファベットしか知らないキーン青年、やがてそんな漢字のパワーにがっかり捕らわれてしまいます。とくに画数が多くて複雑な漢字ほど（不思議なオーラでも感じたのか）ハマってしまい、書けるようになるたびに人知れず「よっしゃあ」とガッツポーズ。未知の世界に分け入って、ナゾの文字の解読に目を輝かせるインディ・ジョーンズさながら、漢字の世界の冒険者気分だったのかもしれない。

ゆるゆるの日本語を学び始める

19歳の夏休み、キーン青年は漢字に続いて、こんどは日本語を勉強することになりました。仲間うちの日本語の合宿勉強会に誘われたのです。ひそかに『源氏物語』の英訳本に夢中になってたところだったので、ほいほい誘いに乗ったのでした。

合宿では日本の小学1年生の国語の教科書を「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」なんて声に出して読んだりした。ただ、日系人の友だちが“先生役、のゆるい勉強会だったから、「日本で生まれた」と「日本に生まれた」はどう違うの？ みたいな疑問にはお手上げ。みなさんはこれ説明できますか？ できないよね。国語の先生でも「はて？」じゃないかな。

キーン青年に本格的な日本語教育のチャンスがやってきたのはその翌年のこと。きっかけはなんと日本との戦争でした。そう、太平洋戦争。海軍日本語学校に入学したのです。「こんどこそ、ガチで日本語が学べる!」。大丈夫かいな？ 戦争なのに……。

一
二
三



『Donald Keene わたしの日本語修行』
河路由佳著
(2014年 白水社)

寝ても覚めても日本語、日本語、日本語……

海軍日本語学校の授業は週に6日、わずか11か月の短期集中型の猛特訓でした。

全寮制だったから、30人の生徒たちは起床から就寝まで日本語まみれ。授業以外の時間にも、だれかがキーン青年の部屋にいきなり駆け込んできて「“ごんべん、をうまく書く方法を発見したぞ!”」「まじ? 教えてくれ」みたいなこともあり、まさに日本語漬け。そのうち生徒同士が廊下でぶつかりそうになったりすると「おっと、ごめん」なんて日本語が口をついて出るくらいになってた。寝言も日本語だったかも。

こうして迎えた卒業式、キーン青年は卒業生を代表して30分のスピーチをしました。1年前まではちんぷんかんぷんだった日本語のスピーチでした。

日本を離れるとき、泣けてきたわけは……

さて歳月は流れ、太平洋戦争も終わって10年後、1955年5月のある日のことです。日本を遠ざかる飛行機に、33歳を目前にしたドナルド・キーン先生の姿がありました。念願だった2年間の日本留学を終え、帰国の途についたところです。ひざの上には開いた1冊の文庫本。

うつむき加減のキーン先生、涙ぐんでいます。日本を去るのがつらかったから? それもあるけど、もっと大きな理由がありました。それはひざに載せた文庫本、永井荷風という作家の小説『すみだ川』。この作品の日本語の美しさ、隅田川周辺の情景をつづった日本語の流れるような美しさに涙がとまらなかったのです。



1909年2月発表の
永井荷風による中編小説



永井荷風 (1879-1953)

そのときの気持ちを語ってキーン先生いわく。「私が14年も日本語を勉強してきたのは、この作品を心から味わい尽くせるようになるためだったのだ」。このことば、ふだん日本語を使っている私たちへのすばらしい贈り物ではないでしょうか。

14年といえば、みなさんが生まれてからの年月とほぼ同じ。でもそれで感心してはいけません。キーン先生の日本語の「勉強」は、このあとさらに60年以上も続くのですから。

〈第2回 終わり〉

開館時間:10時~17時(最終入館16時半)
休館日:月・火曜日・冬季(12/25~3/31)
問合せ先:新潟県柏崎市諏訪町10-17(0257-28-5755)

ドナルド・キーン・センター 柏崎
DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI

ドナルド・キーン、寄り道くなくね 《第3回》



夢にまで見た ヨーロッパの珍道中



ドナルド・キーン少年は9歳の夏休みに、お父さんとふたりではじめてヨーロッパ旅行に行きました。お父さんは小さな会社を営んでいて、出張で毎年ヨーロッパに出かけていたので、一緒に連れていってもらったのです。

今回は、カルチャーショックでんこ盛りだったヨーロッパ旅行のウケる話、まぬけな話、「あるある」な話の中から、いくつかをご紹介します。みなさんのまわりにもいそうな、いまいちイケてない男子の話って感じだけど、キーン少年ならではの何かが見つかるかもしれません。



ドナルド・キーン (1922-2019)

コロンビア大学名誉教授。アメリカ、ニューヨーク生まれ。大学生だった18歳のときに『源氏物語』を読んでその世界に没入、19歳で米海軍日本語学校に入学し11か月で日本語を習得する。以降、日本と日本文学をこよなく愛し、ついに2012年には日本に帰化した(当時89歳)。





お父さんだけしっかりカメラ目線

1931年、9歳ではじめての船旅、ヨーロッパへ！

キーンさんちは修羅場と化した

「パパのうそつき！ 夏休みなのに。こんどこそ連れて行くって約束したじゃん！」「あのなあ、パパは仕事で行くんだ。よぶんなお金もないしな。だいいち子どもにヨーロッパのよさなんかわからんだろうが」「いつともそればっかし。お金はぼくの貯金を使えばいい。それにぼく、ヨーロッパの歴史の本を10回も読んだんだ。10回だよ、10回」。キーン少年が「ねえったら、ねえ」と腕をつかんで揺すっても、お父さんはきっぱりと「だめだ」。

ここでキーン少年がブチキレた。いきなりわあっと泣き出したのです。ひっくり返って足をばたばた、ゲホゲホせきこみながら3時間も泣き続けた。ほとんど泣かない子だと思っていたのに、これにはさすがのお父さんもたじろいで、「わ、わかったよ、……ったく。えっ？ いまなんて？ ぴたっと泣き止んだキーン少年、涙と鼻水で顔ぐちゃぐちゃのまま、心の中で勝利のおたけびをあげたにちがいません。「やったー！」

船の上の「悪い子、あつまれ」

いざ、ヨーロッパめざして出発。当時は大西洋横断の船旅でした。大型客船で1週間以上の優雅な旅だけど、ひとつ困ったことがありました。それは同じ年ごろのアメリカ人の子どもたちがいたこと。「ぼくはピッチャー。で、きみは？」と自己紹介のきまりごとみたいに、必ず野球のポジションをきかれるのです。そもそもキーン少年の並外れた運動オンチぶりは同級生の間で有名。草野球のメンバーに声がかからなかったのです。でも見栄張って「うん、キャッチャー」とか答えたものだから、甲板で野球やろうぜなんてことになったらどうしようと、船旅の間ずっと冷や汗ものだったのです。

でもキーン少年、柄でもないことから船上の仲間をつくっていました。大きな声じゃいえないが、人目を盗んでタバコを吸う「悪い子グループ」にちゃっかり加わったのです。オトナを気取って、くわえタバコでちょっとポーズ……。つるんでひそかに悪さをする仲間同士の連帯感、その心地よさってたしかにある（まねしないでね）。

ちなみにこの旅行が終わってからも、しばらくはお父さんのタバコを盗んで吸ってたけど、半年くらいで「マイブーム」は終わり、その後二度と吸わなかったそうです。



Donald・キーン少年の粘り勝ちで
ヨーロッパ旅行！！

実はヤンチャの素質もあった？



目は口ほどにものを言う？

はじめてのヨーロッパ。フランスはちょうどパリ万博の真っ最中でした。会場でお父さんに連れられて大興奮のキーン少年。お昼にインドシナ館のレストランに入りました。ところが、頭がついたままの大きな魚がまるごと一匹、皿に載って出てきたときに、その魚と目が合ってしまった。「ぎょぎょっ！」と椅子ごとひっくり返りそうになったキーン少年、「いま目玉がぼくをにらんだよ！ こわいよ、やばいよ！」とパニック状態。ウェイターが、頭を切り落としたものに取り換えてくれても、「あの目がーッ！」。皿の上の魚は、目で語っていたんでしょうね。「食えるものなら食ってみな、坊や」。

パリでは大事な出来事もありました。同じ年ごろのフランス人の女の子とふたり、車の後部座席に並んで座ったのです。そんなときの沈黙は気づまりなもの。フランスが大好きだよって伝えたくてしかたがないのに、ことばが通じなくて、もじもじ。もどかしいことこの上ない。この小さな出来事は、キーン少年の心に外国語を学ぶ大きな動機を植えつけ、外国語への興味をかきたてるいちばん最初のきっかけになったのでした。

さて、パリの次は鉄道でウィーンへ向かいました。「乗り鉄」ならずとも、車窓の風景をながめながらの旅は楽しい。お父さんにせがんで途中のスイスの駅で紙コップのグレープジュースを買ってもらったキーン少年、それをぐびぐび一気に飲みほして「ぶはーっ」。ところが、なぜかそのままコテンとお父さんのひざに頭をのせたかと思うと、ウィーンに着くまで爆睡。9歳のキーン少年は、生まれて初めてワインを味わったのでした。しかもイッキ飲みで。

ウィーンのとともベルリン、プラハと、見るもの聞くもの珍しい少年の旅は続きました。いろいろあったみたいだけど、それはまた別の機会にご紹介します。

〈第3回 終わり〉

開館時間：10時～17時（最終入館16時半）
休館日：月・火曜日、冬季（12/25～3/31）
問合せ先：新潟県柏崎市諏訪町10-17(0257-28-5755)

ドナルド・キーンの、寄り道くねくね 《第4回》

わざわ

災い転じて 福となる ……こどもある

「あーもう最悪!」、「ついてねーなあ なんてこうなるわけ?」なんて言いたくなることってあるでしょ。そんなときは友だちにグチるだけグチって、それで済ませるのが賢明(八つ当たりはNGね)。

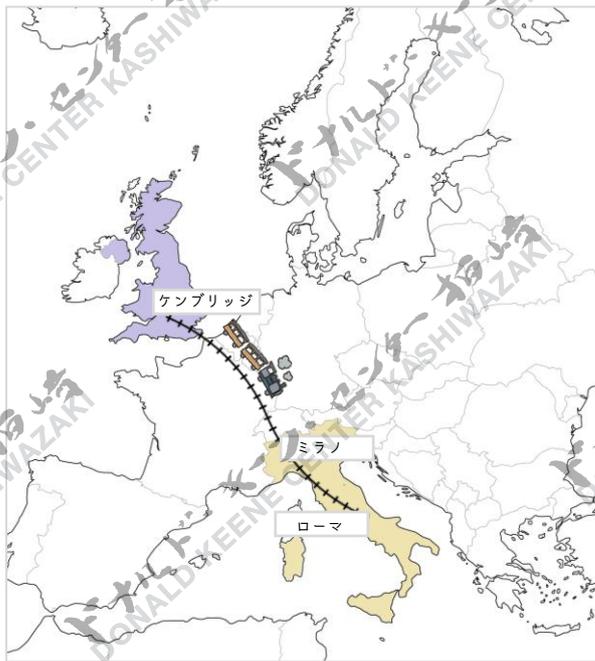
今回は若き日のドナルド・キーン先生が留学中に経験した“ついてない出来事”をふたつ紹介します。ひとつは1948年、イギリスのケンブリッジ大学で学んでいた26歳のときに旅先で起きた「大事件」、もうひとつはその5年後、京都大学留学中に絶好調だった気分が台無しになりかけた「小事件」。

「ついてねー」は案外「ラッキー!」と背中合わせかもよ、と思わせてくれるふたつのお話で、今年度の〈ドナルド・キーンの、寄り道くねくね〉をしめくります。

ドナルド・キーン (1922-2019)

コロンビア大学名誉教授。アメリカ、ニューヨーク生まれ。大学生だった18歳のときに『源氏物語』を読んでその世界に没入、19歳で米海軍日本語学校に入学し11か月で日本語を習得する。以降、日本と日本文学をこよなく愛し、ついに2012年には日本に帰化した(当時89歳)。





油断禁物、は後の祭り

ケンブリッジ大学留学中の最初の冬休み、キーン青年の寮の部屋が大学側の都合で一時的に使えなくなりました。博士論文の下書きを終え、タイプライターで清書しようとしていた矢先だったから、キーン青年は「あちゃー！」。

でもすぐに妙案が。友だちを頼ってイタリアのローマに行くことにしたのです。「清書だけなら旅先でもできるし」。論文の下書き原稿と着替えをスーツケースに詰め込み、大荷物のタイプライターを抱えて、いざローマへ。

パリから先は夜行列車です。個室に仕切られたコンパートメント型の車両でした。途中のミラノ駅でしばし停車。外の空気が吸いたくなったキーン青年、向かいの席の見ず知らずの男に「すみません、ちょっと荷物をみててくれますか」「ああ、いいとも」。……。

駅のホームの冷たい空気で気分をリフレッシュしたキーン青年が数分で席に戻ったところ、あれ、さっきの人はトイレかな？……その瞬間、「荷物が無い！ げ、原稿が！ タイプライターも！」。これは夢だ、悪夢をみてるんだ、とほっぺたをつねって「いててっ！」。

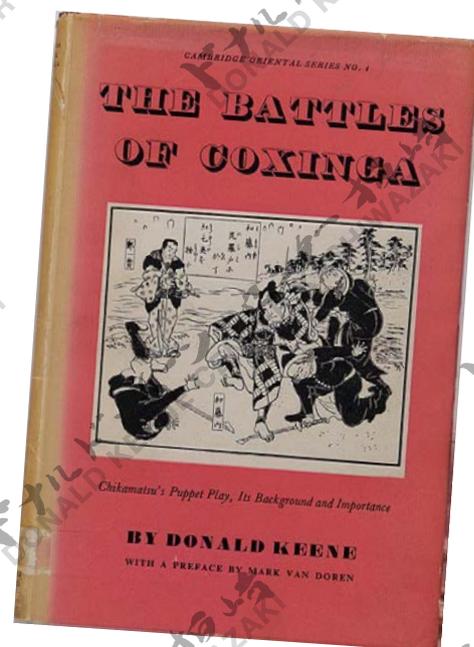
血相変えたキーン青年はそのまま地元の警察に駆け込み、かたことのイタリア語でこの次第を訴えましたが、真剣に取り合ってくれません。「見ず知らずの男を信用したアホなアメリカ人、と思われたみたい。その後ローマには行ったけど、「ぼくの前稿が、くくく……」と気分はずっと落ち込んだまま。1週間後に手ぶらでケンブリッジに帰ったのでした。

災いはその後……

「えらい目にあっちゃってさあ……」。ケンブリッジでキーン青年は、友だちをつかまえては事件のことを話しました（わかるわかる）。するとひとりの友だちのお母さんが、息子からその話を聞いて、食事に招待してくれました。以来、そのお母さんは留学生のキーン青年を家族同然、もうひとりの息子のように扱ってくれるようになったのでした。

また別の友だちがキーン青年のためにタイプライターを調達してくれて、「博士論文を書き直しなよ」。これで元気むらむらのキーン青年、なんと論文を最初から書き直したのです。最初の論文も読んでいたある友人いわく、「おい、これ前より良くなってるぞ」。

ケンブリッジの人たちの温かさに心はじんわり、博士論文もグレードアップ。論文はのちにキーン先生の最初の本として出版されることになります。日本の古典芸能に関する研究をまとめた本でした。災いは災いのみまでは終わらなかったのです。



ドナルド・キーンの最初の本
“THE BATTLES OF COXINGA” (『国性爺合戦』)
Cambridge University Press 1951年

至福の日々に邪魔者が

「すばらしきかな、京都！」。初めて日本に留学し京都で暮らし始めて間もなく、ケンブリッジの友だちに書いた手紙からは、キーン先生の興奮が伝わってきます。イタリアでの盗難事件の5年後のことでした。

古都・京都の魅力もさることながら、森に囲まれた“国宝級、の古民家下宿での暮らしはまさに「あこがれの日本」そのもの。家主の奥村夫人のやさしさと手料理にもぞっこんのキーン先生、京都で至福の日々を送っていたのです。ところがある日、奥村夫人から告げられました。「となりの部屋に新しい人が入居することになったのよ。京都大学の若い先生で、アメリカ留学から帰ってきたばかりなの」。「そ、そうですか」。ツイてねー、英会話のレッスン

相手にされるとか。アメリカ通気取りの自慢話を聞かされるかも。あー、うざっ。



下宿先の日本家屋も大好き！
やさしい家主の奥村夫人も大好き！
とくにおいしい手料理が大好き！！

ダメ押しの一撃は一転して……

その人が引っ越してきた当初、キーン先生は目も合わさずシカトを決め込んでいました。そこに奥村夫人から決定的な一撃。「来客があるので、悪いけど今夜の夕食はおとなりのあの人と一緒に食べてね」、「そ、そうですか」。ツイてねー。ま、今夜だけならしゃーないか。

ところが、「今夜だけ」で終わらなかったのです。その日からふたりは毎晩一緒に食卓につくことになった。どういうことかって？ キーン先生はまさに“終生の親友、を得たのでした。

その人はのちに学者として大成し、文部大臣（文部科学大臣）も務めることになる永井道雄という人でした。この人がその後のキーン先生の研究と人生にもたらした影響や恩恵ははかりしれません。その例をあえてひとつだけ挙げるなら、大手出版社の社長をしている幼なじみの友人を紹介してくれたこと。そこからキーン先生のけた外れの執筆活動が始まり、「日本文学研究者ドナルド・キーン」の名が多く日本人に知られることとなるのです。

〈ドナルド・キーン、寄り道くねくね：おわり〉



大親友となった永井道雄さんと。

開館時間：10時～17時（最終入館 16時半）
休館日：月・火曜日、冬季（12/25～3/31）
問合せ先：新潟県柏崎市諏訪町 10-17 (0257-28-5755)

ドナルド・キーン・センター 柏崎
DONALD KEENE CENTER KASHIWAZAKI